〈近世女性史資料〉(6)

明孝慈列女図會 (1)

——書誌・翻刻——

黄色　瑞華[*1]
若林　俊英[*2]

＊1　城西大学教授・主任研究員
＊2　城西大学女子短期大学部助教授

明孝慈列女図會（みんのかうじ れつぢよ ヅ ゑ）

一　書　誌

所蔵　城西大学国際文化教育センター

書型　大本。縦二五・八センチ、横一七・九センチ。

表紙　厚紙の上に白色に擬宝珠五茎を画いた極薄紙を貼る。

題簽　左肩（毛筆・後貼）。縦一九・二センチ。横四・五センチ。

明孝慈列女図會　全

綴糸　黒色絹糸一本掛。

内題・序（一オ）

明孝慈列女図會序

丁数　全三十七丁。内、序（含目録）二丁。上巻十七丁（墨付三十三面十三オ・ウ欠丁。十七丁ウ・白）。下巻十八丁。

各面　序・八行。本文・十五行。

本文匡郭　縦二十・七センチ。横十五・七センチ。

柱刻　列女圖會上　○一～十七。列女圖會下　○一～十八。

奥付　天保六乙未年　孟秋新鐫

江戸日本橋通壱丁目　須原屋茂兵衛

同　弐丁目

小林　新兵衛

書肆　同　芝神明前　岡田屋　嘉七

京都寺町松原　勝村治右衛門

大阪新斎橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門

二　翻　刻

凡　例

1　『明孝慈列女図會』の忠実な翻刻を旨とする。

2　使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるようにする。

3　漢字ルビもすべて原本のままとする。

4　紙幅の都合上、本文の行移りのみ原本どおりとし、丁移り・表裏の別は、「一オ、」一ウを以てそれを示す。

5　挿絵は省略する。ただし、当該箇所には、〈挿絵〉と明示する。

6　十三丁の欠丁部は、伊達市立開拓記念館本にて補う。

明孝義列女図会巻之上

徳性章第一

[illegible]

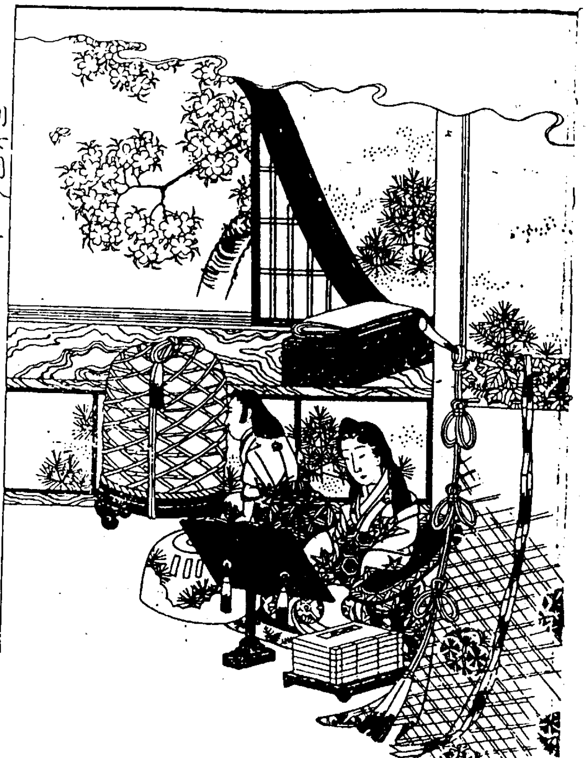
修身章第二

[illegible]

慎言章第三

[illegible]

序1オ・1ウ

列女図会巻上 

列女図会巻之上目録

第一 漢馬皇后之事
第二 曹皇后之事
第三 明徳馬皇后之事
第四 班婕妤之事
第五 懐嬴之事
第六 趙姫之事
第七 馮昭儀之事
第八 周主父妾之事
第九 孟母之事
第十 陶侃母之事
十一 敬姜之事
十二 繞姜之事
十三 楽羊子之事
十四 楽羊子妻之事
十五 晏子御妻之事
十六 黔婁妻之事
十七 京師節女之事
十八 孟姜之事
十九 梁緯妻之事
二十 王氏妻之事

目録終

序2ウ・1オ

明孝慈列女図會序

此列女図會廿章ハかたじけなくも明の太宗皇
帝の御后の
作らせ給ひたる書なり太祖の御后孝慈高皇后
聖賢の
御徳そなハり給ひて朝夕此后を導　教給ひたる
たゞしき
道を普く天下にひろめ女の女たる道を知しめ
給ハんとて此書を
著し給ひぬ后の御位　貴こと上なしといへども
かく有がたき御　志まし
まし侍れバ女と生れたらん程の人ハ此書をあ
がめたつとミ奉り
此御をしへをまもり侍るべき事にこそ

列女図會巻上目録

徳性章第一　修身章第二　慎言章第三
謹行章第四　勤勵章第五　敬戒章第六
節倹章第七　積善章第八　遷善章第九
崇聖訓章十　景賢範章十一　事父母章十二
事君章十三　事舅姑章十四　奉祭祀章十五
母儀章十六　睦親章十七　慈幼章十八
逮下章十九　待外戚章二十

目録終

列女図會二十章のをしへは万世にいたるまで
女の
のつるべき道なれバあふぎたつとミ心にしめ
て
朝夕これをよミわが身にうけもちゆべきもの
なり
いにしへの聖后賢女のたゞしきおこなひを聞
侍れバまのあたりみる心地しておろかなる身
の
感發する心いできてみちにいるたつきとなり
侍るものなれば巻末に列女の故事廿ヶ條をあ
げて
聖訓賢範のこゝろををしひろめ侍るものなり

列女図會巻下目録

第一　漢馬皇后之事　第二　曹皇后之事
第三　順聖皇后之事　第四　班婕妤之事
第五　懐嬴之事　第六　越姫之事
第七　馮照儀之事　第八　周主夫妻之事
第九　孟母之事　第十　陶侃母之事

十一　敬姜之事　　十二　穆姜之事
十三　楽羊子之事　　十四　楽羊子妻之事
十五　晏子御妻之事　　十六　黔婁妻之事
十七　京師節女之事　　十八　孟姜之事
十九　梁緯妻之事　　二十　王氏妻之事

目録終

『序二ウ

〈挿絵〉

一オ

本文

明孝慈列女図會巻之上

徳性章第一

徳性といふハ。おとこをんなにかぎらず。うまれ出るとひとしく天より
あたへ玉へる明徳。わが心のうちにそなハれるをいふなり。仁義礼智信の
五常も。此徳性よりなすわざなれバ。うまれつかざる事をしゐてもとむるに
あらず。つねづ〳〵心をたゞしくし。おこなひミちにかなひ侍れバ。徳性くらからず。
天理とわが心と一たいにして。人の人たる物なり。されバ徳性ハ。たとへバいし
ずへのごとくなるものなり。大きなる家も。石
ずへかたからざれバ。かたぶき
たをれ。人の身も。徳性あきらかならざれば。禽獣
にことならずして。よろづ
の悪行ほしいまゝなるべし。此徳性をまつたふ
するにハ。つねにつゝしミの心を
わすれず。たつにもゐるにも道にかなハんとね
がひ侍らバ。たとひ徳性のかゞミ
しばしくもり侍るとも。修行のとぎみがきにて。
二たびもとのごとくあきら
かなるべし

修身章第二

修身といふハ。目にあしきいろをミず。ミゝにた
ハれたるこゑをきかず。口に
おごれることバをいださず。身のおこなひをた
ゞしくおさむる事なり。目に
見。耳にきく。口にいふハ外になすわざにて身の
おこなひの害になるまじとお
もふべからず。人の心ハうつりやすき物にして。
ミる事きく事につけて。よきにも
あしきにもうつるものなれば。よろづの事に心
づかひして。つとめつゝ

『一ウ

しむべき事なり。いろどりうるハしき衣装を着て。
身をかざらんよりハ。
貞心にして。物にさかハざる順徳にて。身をおさ
めバ。徳のひかり身をかゝ
やかす事。あやにしきにもまさり侍るべし。人ご
とに徳をまつたうせるハま
れなる物なれば。つねゞ心にかけてあしきを
さり。よきにしたがふこそ。身
をおさむるミちにて侍るべけれ。女は外にいで
ず。家のうちをおさむる物なれバ。
まづその身の行儀作法たゞしくして。家内の人
見ならひ。徳に化しておさ
まるやうにすべき事なり。わが身のおこなひよ
こしまにして。家内の人
のたゞしからざる事をせむるハ。ひが事ならずや

慎言章第三

慎言といふハ物いふ事をつゝしミて。かるゞ
しくいひ出さぬ事なり。人の世に
ある一日のうち。見ること。聞事。おもふ事さまゞ
おほしといへども。こと葉に

〈挿絵〉

あらハさゞれば。人形のごとくにして。よろづの

一二オ

二ウ・三オ

事とゝのほらず。いひいだすことバ。みちにかなひ
ぬれば。其事とゝのほりて。くゆる事なかるべし。
もし理にたがひぬれば。かならずわざハひ
出来るものなり。人の心のよしあしを。

〈挿絵〉下部

いひいだすことバにてあらハるゝものなれば。
一ことといひいだすにも。よくゝあとさき。かん
がへ思惟していひ出すべし。すでにいひ
いだすよりしてハ。かならず其ことバのたがハ
ざる
やうに。おこなふべき事なり。よのつねの人
のならひとして。あとさきのわきまへもなく。
ことばのいひいだしやすきにまかせて。物
いひて。ことバのしたよりも。なすわざハ。いひし
にも
似ざるありさま。あさましき事ならずや。いハん
や女ハ
天性しづかなる徳をそなへたるものなれバ。こ
とバおほきをたつとまずことば
おほければ。失おほし。されば尚書にハ。をつとの
いふべき事に。女のさしいで。
物いふをめんどりのときをうたふにたとへ。其
家かならずわざハひおこると

一三ウ

いひ。毛詩にハ。女のべんぜつすぎたるハ。これみ
だれのはしなりとそしり礼記にハ
女のことバゝ梱より外へいだすべからずと。い
ましめたり。たゞことバを口につゝ
しミて。まことを心にそなへ侍らバ。心ことばみ
ちにかなひて。おのづから身
もおさまり。いゑもとゝのほり侍るべし

謹行章第四

謹行といふハ。おこなひなすしわざをつゝしむ
事なり。女のおこなひあしきに三
つのいはれあり。一つにハわが身をじまんして。
わがなすわざをことゞくよきと思ふ
人。二つにハ人をないがしろにして。おごる心の
ある人。三つにハ心にハあしきとしれ
ども。われとわが心をあざむきて。よき事をなす
やうにもてなす人なり。
此三つの心ばせ。ひとつもあらん人ハ。女の徳行
かけたる人なれば。あさゆふにつゝ
しミつとめて。わがおこなひのたゞしからん事
をこひねがふべし。つたなき人の
ならひとして。人前にてハよき人のふりをして。
われひとりあるときハ。見る

人のなければ。何事をなしても。くるしからぬと
思ひて。たゞしからぬ事をも
はづる心なく。おこなふものなり。これハ　〈挿絵〉上部
たゞ人ミせばかりをせんと思ひて。しん
じちのミちにあらず。われこそミる人なき
と思ひても。天の照覧かゞミにむかふかごと
くなれバ。かげひなたなく。身のおこなひ
たゞしきやうに。つゝしむべし。善悪ともに。
日々にかさなり。月々につもりぬれバ。小か
ならず大となる物なれば。はじめハすこし
きなる事のやうなれども。後にハおほきな
る善悪とわかるゝものなり。たとへバ木のわか
ばへ。二葉にもへ出たるときハゆびのさきに
てもつミきらるゝ物なれども。とし月かさ
なり大木となりぬれバ。をのまさかりにても。
たやすくきりがたきがごとし。すべて女のおこ
なひハ。つねに物やわらかにして。さかふ心なく。
たゞしく
いさぎよき道をまもり。外の事ハ。をつとにまか
せてとりもたず。うちの
事ハ。わが役なりと心えて。つとめおこなひ。家の
内をおさめ。上下やハ

一四オ

一四ウ

らぎしたがひ。一族したしミむつまじきやふに
なすべきこそ。たゞしきお
こなひと申侍るべけれ

勤勵章第五

勤勵といふハ。其所作をつとめはげむことなり。
人とうまれたるほどの物ハ。
それ〳〵のなすべきわざあるものなれば。おこ
たりほしひまゝにして。むなしく

〈挿絵〉左部

月日をおくるべからず。されば。さふらひハ〈挿絵〉下部
がくもん武藝をつとめ。百姓ハ耕作を
つとめ。職人ハさいくをつとめ。商人ハうり
かいをつとむるごとく。女も。をうミ。はた
おり。物ぬふわざをつとめなすべし。古へ
のひじりの御代にハ。かたじけなくも。み
かどミづから。すきをとり給ひて。三度
つちをすきたまひ。ささきミづから。くわの
葉をとりて。かいこをかひ給ひて。民に
さきだちて。つとむるわざをミちびき
をしへ玉へり。たかきもいやしきも。をんなハ
ぬいはりのわざをなす事。さだまれる
職分なりといへども。まづしき女。其所作

」五オ

をつとむるハおほく。とめる女ハ。大かた
おごり長じて。わが所作におこたるもの
なれバ。たとひくらゐたかく。やんごと
なき人のむすめたりとも。すでに嫁
して。をつとにつかゆるときハ。衣裳ハミ
づからしたて。きすべきことなり。たつ
ときすら。かくのごとくなれば。いハんや其
しもつかたをや

〈挿絵〉下部

』五ウ

警戒章第六

警戒といふハ。心におそれいましむる事
なり。なに事もわが心まゝにして。おそれ
いましむることなければ。善にハうとく成
行。悪ハ日々にかさなりやすきものなり。
たとへバ冨貴なる女ハ。時にほこりて。お
ごりのあらん事を。おそれいましめ。貧
賤なる女ハ。世をうらミて。すてふちなる
心のいでなん事を。おそれいましめ。常に
安楽なる女ハ。かねてよりうれへあらん事を。お
それいましむべし。よのつね一たび
心に思ふ事。一たびおこなひなすわざにつきて
も。けだいの心なく。おそれいまし
めて。よこしまならざるやうに。つとめつゝしミ。

」六オ

ひとりゐる時も。しうとしう
とめのまへにゐると思ひて。ゆだんの心なく。ま
ことの道をまもるべし。かくの
ごとくつゝしミぬれバ。徳家内にあまねく。をこ
なひ神明に通じて。さかへ行
こととうたがひなし。つねに悪念のおこるはじめ
をいましむれば。あやまち生ぜ
ず。あらかじめうれへあらんことをおそるれば。
わざハひきたる事なし

節倹章第七

節倹といふハ。おごりをふせぎ。分際相應にする
事なり。家居衣類食物にい
たる迄。うちバなるハ。其身をたて。おごれるハ。徳
をそこなひ。わざハひをまねく
こと。さだまれる道理なれども。人ごとに分際に
すぎ。おごりにしたがひやす
きハ。ミなこれ心ざしたらず。理くらきよりおこ
れり。一すぢのいとも。工女のつとめ
よりなり。一りうの食も。農人のちからより。いで
たる物なれば。いかばかりのく
らうより。つくりいだせるものを。たやすくおご
りについやさんハ。もつたいな
き事とおもひ。をろそかならぬやうに。もちゆべ
きことなり。上におごりあれ
ば。下かならずならふものなれば。まづ
上よりおごりをいましめて。みちびき
侍るべし。よく此ことハりをわきまへ侍らバ。
あざやかなるきぬ。あつきあぢハひは。
かへりて心にやすんぜずして。そさう
なる衣るい食物。たれりと思ふ心侍る
べし。すべて女の衣裳。うるハしからん
ことをねがへるハ。人の目をおどろかし。
こゝろをまとハしめん事をもとむる。
よこしまなる心よりおこりて。あさ
はかなるこゝろねなり。まことのこゝろ
ざしなくして。外のかざりをのミ。心に
かけなば。いかでか人にしたハれ侍らん
や。身にハつゞりごろもをかけ侍る共。
心を錦になし侍らんこそ。女の本意ならめかも

積善章第八

積善といふハ。つねづね善業をなし。慈悲の心を
専とする事なり。さかゆるも
おとろふるも。吉凶ともに天道より。さだまりた
る事といふべからず。ミな我

〈挿絵〉上部

身よりなすわざにて。よき事つもりぬれバ。天の
さいわひをかうむり。あしき
事つもりぬれバ。天のわざハひのがれがたき事。
さだまれる道理なれば。常に
じひの心をもち。善業をつとめなすべき事なり。
しかるによき人のと
きにあハずして。かへりてさいなんにあひ。あし
き人のとミさかゆるもあれバ。これを
見る人善事をなしてもえきなしなどいふ人あり。
これ無智の人のいふこと
にて。道理にくらき心得なり。それ善をなして天
のさいわひをかうむり。悪
をなして天のわざハひにあふことハ。さだまれ
る道理なれバ。たとへバなつの日あつく。
冬の日さむきがごとくにて。いにしへもいまも
かハらず。さだまれる道理なり。し
かるにいま悪をなす人のかへりてさかへゆき。
善をなす人のかへりておとろふるハ。
これなつの日さむく。冬の日あつきがごとし。こ
れハ天地の変といふ物にて。常の
理にあらざれば。たま〳〵五十年に一度。あるひ
ハ百年に一度かやうのことありとても。

定まりたる事にハあらず。もし善をなす人。天地
の変にあひて。其身さい
わひにあハずとも。善業のつもり子孫
にむくひて。つゐにハさかへゆくべし。悪を
なす人。天地の変にて其身わざハひに
あはずとも。悪業のつもり子孫にむくひ
て。つゐにハおとろへはつべし。よく〳〵この
ことハりをかんがへさとりて。慈悲ぜん
げうをなすへき事なり

遷善章第九

遷善といふハ悪をあらためて。よき道
にうつる事なり。世の中のありさま。ちゐ
すぐれたる人ハまれにして。おろかなる
人のミおほければ。常になすわざ。あや
まちのミおほし。あやまりてあしきと
しり。あしきとしりてあらためなほす
人ハ。つゐに善人となるべし。あやまり
をもしらず。しりてもあらためず。か
へりてあやまちをおほひかくして。
あやまらぬさまする人ハ。悪日々につもり。
善日々にうとく成て。つゐに大悪人と
なるべし。惣じて。女におほきなる過ち

〈挿絵〉下部

』七ウ

〈挿絵〉下部

」八オ

三つあり。一つにハおこたりあなどるこゝろ
二つにハりんきふかき心。三つにハよこしまに
ひがめる心なり。おこたりあなどる心あれバ。
わがをつと。しうと。しうとめをもないがしろ
にして。うやまひつかふるミちかくるものなり。
りんきふかき心あれバ。むごき心出来て。わざ
ハひおこるものなり。よこしまにひがめるこゝろ
あれば。人のをしへいさむるをもきゝいれず。わ
が心
まかせにして。なしたきまゝにするゆへに。みだ
りなる
心いでくるものなり。此三つのあやまりあらん
事を。
ふかくつゝしミおそれ。悪ハいさゝかの事なり
ともあらため。善ハすこしきなり
ともつとめなすべき事。女のあらまほしきミち
ならんかも

崇聖訓章第十

崇聖訓といふハ。いにしへの聖徳そなハり給へ
るきさきたちの。徳業かきしるし
をきたるをしへを。あがめたつとびて。
わが身の師となすべし。禹王の塗山

〈挿絵〉下部

』八ウ

氏。湯王の有莘氏。文王の后妃。明
の大祖の高皇后などのたぐひ。
いづれも聖徳そなハり給ひ。をしへ
をすゑの代にてらしたまへば。
あがめしたひ奉りて。たつ
とき御身のうへにてさへかく
ミちをつゝしミたまひ。いさゝかも
おごりたまふ。御おこなひなきこと
おもひハかり。しもつかたの人ハ。ます〳〵はげ
ミ
つとめて。をんなの徳行をおさむべきことなり

景賢範章第十一

景賢範といふハ。いにしへの賢女たちの行跡。書
しるしたるをよミて。後の世の
女の手本として。まなびしたふべしといふ事なり。
かゞミにてかたちのよし
あしを見るごとく。いにしへの賢女たちをかゞミ
として。わがおこなひのよしあしを
てらし見ば。善悪ともにあきらかにして。悪をは
ぢ善にすゝむたよりとな
りはべらんかし

事父母章第十二

「九オ

これハをやに孝行をなし。つかへたてまつる事
を。のべたる章なり。孝行といふ
にもしなぐ〳〵あり。或ハ親をやしなひ。あるひハ
あさゆふミやづかへし。又ハかほかたち
をにこやかにするはがりハ。孝行の末にて。まこ
との孝にあらず。心のそこにとほ
りて。いつくしミ愛しうやまひたてまつりて。い
さゝかもをやの心にたがひ奉らず。
心をやすんじたまふやうにするをこそ。孝行の
もとゝは申侍るべけれ。孝行の
ミちハ人のをしへをきゝてしるべきにもあらず。
天性子たる物のこゝろに。そなハり
たるミちなれども。女は他の家へゆくものなれ
バ。をやとうとくなり。あるひハを

〈挿絵〉

つとにひかれ。或ハ子にまどひて。いつとなくふ
孝になりゆく

〈挿絵〉下部

ものなり。父母むなしく成たまひたるのち。すぎ
にしかた
のふ孝をくいかなしむといふとも。ゑきなきこ
となれば。親
のいのちあしたゆふべをはかりがたきことを。

『九ウ

十オ

かねぐ〳〵心に
わすれず。時のまもおこたるまじきことなり。
又たま〳〵孝行のこゝろざしある人にても。
その身おさまらずして。人のあざけりあれバ。
をやをはづかしめて。ふ孝にひとしけれバ。
まづわが身をたゞしくおさめ。ほまれをも
うる人ハ孝行もをのづからおこなハれ侍るべし。
子のおやにつかへたてまつるミち。よめのしう
と
しうとめにつかへたてまつるとおなじだうり
なれば。
するのしうとしうとめにつかへたてまつる章
段と。
見あハせしるべきものなり

事君章第十三

これハ主君につかへたてまつり
て。忠をつくす事をのべたる
章なり。女の主君につかふ
まつるハ。左右にちかづき
奉るによりて。かならず
なれやすく。おごりやす
きものなれば。つねにま

〈挿絵〉下部

『十ウ

ことの道を心にかけ礼
義をつゝしミ。あさゆふ
おこたる心あるべからず。
たとひ御寵愛に
あづかるとも。我
ひとりもつハらに
せんとおもふ
べからず。
恩顧ありて。何ほどねんごろにおほせたまふと
も。たのミとすべからず。おそれつゝしミて
なるゝ心あるべからず。寵にほこりて外ざまの
事までもはからハんとおもひ。さだまり
たる法をもまもらずして。わがまゝにする人ハ。
わざハひのがるべからず。人の寵愛を　〈挿絵〉下部
ねたむべからず。いにしへより國家のさかへお
とろふること。おほくハ女のこゝろ
よりおこれり。女の善徳ある人ハ。たとひ主君の
よこしまなる行ひ
ありとても。その身たゞしくして。あさゆふにい
さめまいらするに
よりて。君もつゐに化したまひて道に入たまふ
事。その

一十一オ

ためしもつともおほし。かんがへしりてミやづ
かへのミちを。
つゝしむべき事ならずや。

事舅姑章第十四

これハ。しうと。しうとめにつかふまつる道をの
べたる
章なり。すでによめいりしてのちハ。しうとし
うとめをわがまことのをやと思ひて。孝
行をすべし。うやまひいつくしミ奉りて。
心をもつはらにしまことをつくして。すこ
しもおこたるべからず。あるひハ衣裳を　〈挿絵〉下部
きせたてまつり。あるひハ食物をすゝめ
たてまつるのたぐひハ。かたちバかりの
孝行なれバ。時として御こゝろかなハ
ざる事おほかるべし。たゞこゝろの
孝行を本として。まことの道
をつくし。常にそのこゝろのたの
しミやすんじ玉ふやうにと
おもひ。そのこゝろざし玉ふ
ごとくにしたがひて。しうと
しうとめのいつくしミ
たまふ人ハ。われもおなじく

一十一ウ

いつくしミ。うやまひ給ふ
人は。われもおなじくう
やまひ。なに事につけ
ても。我まゝになさずしてとひうかゞひ。い
ひつけたまふことハ。たとひわがこゝろにあ
わずとも。いそぎそのことばのごとくにをこ
なふべし。しうとしうとめのこゝろにたがひ
侍らバ。わがをつとによくつかゆると思ふとも。
をつとのこゝろにかなハずして。つゐに離
別のうれへをまねくべし。つゝしミおこたる
ことなかれ

奉祭祀章第十五

奉祭祀といふハ。をつとの家の先祖をま
つりとふらふ時。夫婦もろともに。まつりの
事をつとむる事なり。それ先祖の神霊
をまつるハ。人道の大事なれバ。まことのこゝろ
天とひとしからざれバ神霊うけたまハず。
たとへバすきとをりたる玉をもちて。日に

一三オ・ウ欠丁

なれば。第一に。一門一族をしたしくして。そのあ
まりを。他人におよぼすべき事なり
たとへばうへ木の根に生気ありて。枝葉をもさ

『十二ウ

「十二オ

〈挿絵〉下部

かやかし。内にもゆる火のひかりを
外にあらハすがごとし。もとよりわがしんるい
を。したしくおもふこゝろハ。たれも
あるべきが。そのえんじやなどいふものハ他人
なればわけへだてのこゝろありて。うと
きものなり。このこゝろミな道理にくらきより
おこれり。えんじやといふ物も。
わが親類より出たるゆかりなれば。いかでか他
人のごとくおもひ侍らんや。およそ
親類一門とまじハるのミちは。人の善ハいさゝ
かもこゝろにわすれず。悪ハうち
ながしてこゝろにとゞめず。人のいひなしをき
ゝいれず。ひたすらしたしミむ
つまじきこゝろを。ふかくしてまじハり侍れバ。
おのづから一族和順して。その
家さかふべき事にこそ。

慈幼章第十八

慈幼といふハ。いとけなき子を。いつくしミ愛す
る事なり。人のをやの子をあい
するミちハ。天性なれバ。たれもおなじかるべし。
しかれども。愛するうちにをしへ
ありて。ほしひまゝならしめぬこそ。まことの慈

愛のミちなるべけれ。そのこ
のこゝろまゝにそだつるハ。姑息溺愛とて。かへ
りて子をにくむにひとし。

「十四オ

〈挿絵〉

十四ウ・十五オ

かくのごとくそだてゝ。子のあしくなりたる〈挿絵〉上部
のちに。子をせむべきにあらず。ミなをやの
とがなるべしとぞ

逮下章第十九

逮下といふハ。しもざまの女をあハれミ。ひき
たつやうにする事なり。いにしへの賢女ハ。
をつとのしそんはんじやうのために。徳義
たゞしき女あれバ。わがくちよりいひあげ
て。ミやづかへにいだしたまへば。ましてねた
ミたまふこゝろハ。いさゝかもなく。かへりて
いよ〳〵したしく。ねんごろにしたまふこと。
そのれゐすくなからず。われひとり寵
愛あらんことをねがひて。りんきのこゝろ
あるハ。わざハひをまねくもとひなり。わが
ほかに。をつとにつかふる女あらバ。ひきたつる
こゝろをもちて。つねゞ〳〵をつとにもよさまに
いひなし侍れバ。をつともつまのおとなしき
こゝろをかんじて。妻を見すてず。りんき

「十五ウ

ふかきつまハ。じやけんなるこゝろあるに
より。をつともおそろしくおもひて。
いつとなくしだひにとをざかり

〈挿絵〉下部

へだゝるものなれバ。上下のへだて
なく。ことゞ〳〵くしたしミ和して。
いへのさかへ子孫のはんじやうせん事を
おもふ妻ハ。おのづからその身さかへ。家を
たもつべき事なるべし

待外戚章第二十

待外戚といふハ。天子のきさき。大名高家の北の
方と。
よバれたまふ御身の。わがしんるいをときめかし。
をごらし
たまハぬこゝろもちのことなり。君の御てうあい
ふかきにまかせて。わがしんるいを

「十六オ

世にいだしときめかするハ。かならずゝゐと〈挿絵〉上部
げずして。かへりてわざハひをまねく。なか
だちとなる物なり。もとよりそなハりきた
れる。家老高官の人ハ。其才徳ひいでたる
人にて。国のまつりごとをおこなふにも。
よこしまなる事あらず。内縁にて才徳を
えらまず。にハかに高官にのぼる人ハ。才智く

らければ。しほき非道なる事おほく。又ハ内
縁のつよきをたのミて。人をかろんずるゆへに。
萬人のうらミいきどほりをかうむりて。つ
ゐに国のミだれ。身のわざハひをえん事。う
たがひなし。されば漢の馬后。唐の長孫皇
后などハ。みかどより御親類を世にいだし。
まつりごとをもとりおこなハせたまハんと。
たび〳〵倫言ありけれども。此わきまへを
よくしりたまひて。ふかく辞退したまひ　〈挿絵〉上部
たるゆへに。わざハひつゐにいたらず。めでたく
さかへゆきたまひけるに。漢の呂后。霍后。唐の
楊貴妃などハ。此ことハりをわきまへずして。
わが親類時めかしたまひしゆへに。いづれも
天下をミだし。身をほろぼし。行すゑあ
さましくなりはて侍るなり。おそれいま
しむべきをしへならずや
明孝慈列女図會巻之上終

『十六ウ

欠丁部（十三オ・ウ）

むかひて火をもとむれバ。たちまち天　〈挿絵〉下部
火きたる。くもりたる玉なれば。ちからを
つくしてもとむといへども。天火うつらざる
がごとし。かミ天子のきさきより。しも

『十七オ

万民のつまにいたるまで。まことの心を
つくして。先祖をまつり侍らバ。神霊のかん
をうをかうむりて。身をたもち子孫さ
かへん事うたがひあるべからず

母儀章第十六

母儀といふハ。母たる人の行儀たゞしくして。
子をミちびきをしゆる道理なり。惣じて
子といふものハ。父にハはゞかりちかづかずして。
母にのミしたしミよる物なれば。母のをしへ
肝要なり。ぜんあくともに。大かた母に
あやかりうつる物なれば。母の徳義たゞしく
して。これを見ならひて。おのづからあくに　〈挿絵〉上部
おちいらず。善におもむくやうにそだてをし
ゆべし。いつくしミ愛するこゝろざしハ。わが心の
うちにおさめおきて。これにむかひてハ。いかに
もきびしく。はげしきよそほひをなして。
をしへいましめ。かれがほしいまゝなるおこな
ひにしたがふべからず。愛するとおもひてかれ
がこゝろまゝにそだて。悪人となり侍れバ。かへり
てにくむにおなじからずや

『十三オ

睦親章第十七

睦親といふハ。親類一族の人にしたしミむつまじ

うすることなり。仁の道ハ。慈悲恩愛をもとゝすれば。親類も他人も愛せずといふことなき物なれども。そのうちに次第ありて。まづ他人をしたしミ愛して。親類を次とするハ。ひがこと

『十三ウ